

# 照明の色が発話行動に与える影響

○大林春香<sup>1</sup>・田中秀樹<sup>2</sup>・#森本修充<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 広島国際大学大学院心理科学研究科・<sup>2</sup> 広島国際大学心理学部)

## 目的

私たちにとって話すという行為は重要なコミュニケーションツールの一つである。実際、私たちは日常的に様々な場面で様々な他者と対話しており、言葉のやりとりをスムーズに行うことが求められている。発話の流暢性について、無声休止、有声休止、スピーチ混乱が少なく、発話量が多いほど高いとみることができる (Pope & Siegman, 1964)。本研究では、これら 4 つを発話行動とする。話すという行動に影響を与える環境要因の一つに照明がある。短時間の色彩照明呈示によって、赤色は緊張と混乱を増加させること、青色や緑色は緊張と混乱を軽減させることが報告されている (今野・土肥・宮川, 2014)。また、色彩照明下での作業成績について検討した研究では、照明色が好みであるほど、作業の生産性と正確性が高くなる傾向があることが指摘されている (高橋, 2005)。

そこで、本研究では照明の色やその色の好き嫌いが発話行動に与える影響について検討することを目的とした。

## 方法

**対象** 書面で同意の得られた大学生 51 名

**手続き** 対象者をランダムに 4 群 (白色照明群 12 名, 赤色照明群 13 名, 青色照明群 13 名, 緑色照明群 13 名) に分けた。気分は POMS 短縮版 (横山, 2005), 照明色の好みは色の好き嫌いを 0~100% で評価した。対象者は、色刺激が呈示された面接室で 1 分間待機後、実験者と対面形式で面接を行った。面接後は面接室を退出し質問紙に回答した。面接内容はボイスレコーダーに録音した。

各群において、発話行動に違いがあるかを検討するため、群を独立変数とし、発話行動の各要素を従属変数とする一要因分散分析を行った。

さらに、各群において、色の好き嫌いによって発話行動に差があるかを検討するため、*t* 検定を行った。

## 結果

発話行動のスピーチ混乱率においては、青色照明群が白色照明群と比較し有意に低く ( $p < .01$ ), また緑色照明群が白色照明群と比較し有意に低い

( $p < .01$ ) ことがわかった (図 1)。

さらに、スピーチ混乱率において、青色照明群 (図 2) では色の好みによる有意差は認められなかった ( $p = n.s.$ ) が、緑色照明群 (図 3) では呈示された色が好みだとスピーチ混乱率が有意に低かった ( $p < .05$ )。

一方、無声・有声休止率と発話量、気分については有意な群間差は認められなかった ( $p = n.s.$ )。

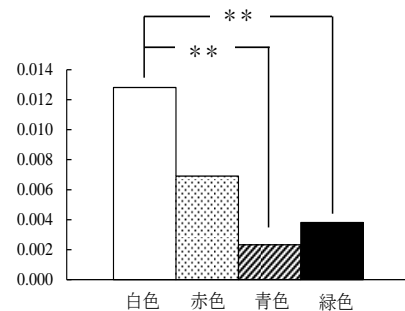


図1 照明色の違いによるスピーチ混乱率の比較

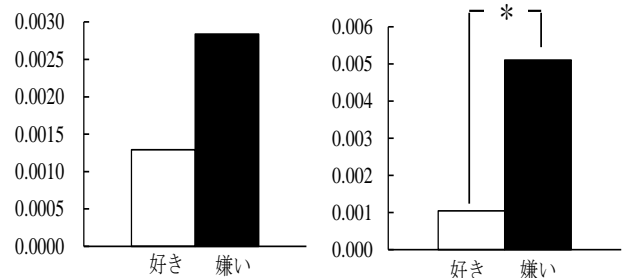


図2 青色照明の好き嫌いの違いによるスピーチ混乱率の比較

図3 緑色照明の好き嫌いの違いによるスピーチ混乱率の比較

## 考察

本研究の結果、照明色の違いは、主観的な気分の変わり方には影響しないが、行動面においては影響を与えた。青色照明下と緑色照明下では、白色照明下と比べてスピーチ混乱率が低いことが分かった。つまり、青色または緑色照明下で話す場合は白色照明下で話す場合より、言い直しや言葉に詰まることなどが少ないことが示唆された。また、青色照明の場合は好みを考慮しなくてよいが、緑色照明の場合は好みを重視する必要があることも明らかになった。以上本研究より、話し手に合わせて照明環境を工夫することで、カウンセリングを行う際にも、話し手が話しやすくなる可能性が示唆された。